

1. 答練を受ける意義



■ ヤマ当て？

- 100%ど真ん中（ないしそれに近い精度）で当たれば良いが…
- 答練では最新判例や下級審裁判例、学術論文等を素材にした問題が多いが、本試験ではそれらを知っていることは求められていない
- ヤマ当てのために答練を受けるのは疑問（当たればラッキーぐらいのスタンス）

■ 答練で良い成績をとるため？

- 概ね正の相関関係はあるが…
- 本試験と出題傾向・質を完全に一致させることは不可能（予備校答練は「ウラ」に縛られるし、従来の傾向を大幅に変更することもできない）

1. 答練を受ける意義（続き）



■ ペースメーカー

- 「●月●日に●●系の第●回をやろう」というように、自らで無理のないスケジュールを設定して、そこへ向けて勉強していく（ただし、通信答練という性質上、自律できないと自堕落になるだけなので、要注意）

■ 弱点の発見

- 何ができる、何ができないのか、その理由は何かを確認し、弱点を潰していく

■ 受験生内での相対的な立ち位置の把握（あくまで目安）

- 「良い点が取れたか」ではなく、「悪い点が付いていないか」（悪い点が付く答案には絶対に何かしらの問題がある）

1. 答練を受ける意義（続き）



■ 他者評価を受ける機会

- 司法試験は採点官に評価されてナンボの世界であり、自己評価と他者評価のギャップを埋めていく必要がある

■ 「書く」訓練・試験慣れの機会

- 論文式試験は、初日 7 時間、2 日目 6 時間、中日を挟んで、3 日目 4 時間、1 頁23行×8 頁の答案に、手書きで、長文の事例を読んで、文章を書き続けるという「極めて異常な試験」（初めて受けた人は途中で腱鞘炎になることも）

1. 答練を受ける意義（続き）



- 基礎的な問題集や過去問を通じて会得した（はずの）、「問題文の読み方」や「物事の考え方」、「答案の書き方」が初見の問題で実践できるか
 - 司法試験本番で解く問題はまず間違いなく見たことも聞いたこともない初見の問題であり、問題と解答が「1対1対応」になっていては、絶対に解くことはできない
- 本番のシミュレーション
 - タイムマネジメントや、どう「足搔く」か、も含めて

2. 答練の受け方



- 毎回、本番と同じだと思って臨むこと！！
- 本番と同じ条件下（2時間、六法以外何も見ない、ボールペン書き等）で受けることは最低条件
- できれば、本番よりも厳しい環境下に身を置く（制限時間を1時間45分にする等）
- アクシデントのシミュレーション

3. 復習の仕方



- 「なんとなくの自己評価」（「50点前半ぐらいかな」程度）
- 解説冊子を確認（できなかつたところを中心に）
 - 本文は、当該設問を解くために必要な知識・論点等の解説
 - ※は、別解、加点事由、補足説明、周辺知識等
- 解説講義（各科目1時間程度）を視聴（特に、「問題文の読み方」や「物事の考え方」、「答案の書き方」を解説している箇所を重点的に）
- 採点基準を基に、自己採点（「なんとなくの自己評価」とのギャップがどの程度あるのか、ギャップが大きければその原因は何かを分析）

3. 復習の仕方（続き）



- 成功したことと、失敗したことの分析（論点の出来不出来だけでなく、時間配分、答案構成のやり方、応用問題の解き方等の「試験の受け方」の出来不出来も）
- 添削済み答案が返却されたら、コメントを熟読
- 自己採点の結果と照らし合わせて、自己評価と他者評価のギャップがどの程度あるのか、ギャップが大きければその原因は何かを分析（点数の良し悪しは気にしない）
- 他の受講生の答案を見て、ライバルの実力を把握すると同時に、盗める点を盗む（特に評価の高い答案から）

4. おわりに



- 「【勉強法】答練の受講方法」（担当講師のブログ）

<https://ameblo.jp/ywagaroot/entry-12340489114.html>